THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Dec. 30th, 1957. No. 310.

關西大學學報

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十二年十二月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第三一〇号

昭和３２年１２月　第３１０号

昭和三十三年度大学一覧

關西大學學報局

共同隠岐文化綜合調査

―三十二年度国語学班報告代匠記―

島根大学
関西大学

土部　弘

国語学班メンバー

文学班―吉永登教授（関大）、小原幹雄助教授（島大）、神堀忍教諭（関大一高）

言語班―広戸惇助教授（島大）、土部弘講師（関大）

学生―小野頼男（関大文四）、村岡克彦（島大文三）

調査計画のあらまし

本年まで――隠岐綜合調査が第三回に及んだ昨年度、その一環として国語学班が編成せられることになった。当初メンバーは、吉永教授、広戸助教授、土部講師、東郷富規子助手の四名であったが、一行中ただ一人の隠岐踏査経験者である広戸助教授が、年来の病勢衰えず渡島真際遂に参加を断念された。一行は出発に際し出雲市の広戸氏宅に赴き、調査計画の最終打合せ会を行った上、テープ・コーダー、接写装置を片手に「畳の上の水練」の不安を抱きながら、未踏の地西郷港に下り立ったのだった。――昭和三十一年七月十六日国語学班隠岐探訪の第一歩――こうして穏地郡都万村「高田明神」の文書調査、周吉郡西郷町東郷、穏地郡都万村、同郡五箇村の方言採録を中心に踏査した「予備調査」の旬日は、他班、地元の方の御誘引、御援助によって予想以上の成果を見ることが出来はしたが、なお前途程遠しの憾みを残して本年度に持ち越されることになった。

本年度は、まず広戸助教授が快復、新たに小原助教授が参加となった。東郷氏が病気のため不参加となったのは残念であるが、代って神堀氏が、更に学生二名が希望参加となって、本年で現地調査打ち切りという「勝負どころ」（井上吉次郎教授のコトバ―本誌九月号七ページ拝借）に臨んだわけである。

言語班――纏った隠岐方言の研究は、横地満治氏（周吉郡中村助役）の「隠岐島の昔話と方言」（昭和十一年刊）を資料として石田春昭氏の打ち込まれた鍬から始まった、と言ってよい。爾来この方言に打ち込まれた先学――広戸惇氏はその最たる人――の鍬は、アクセント・語法等の分類、整理に多大の成果を世に問い、今日吾々に与えられている隠岐方言の知識は決して少なしとはしない。しかし、ここにも語彙・文型の標本抽出法には漏れた、しかも国語史や方言文法に貴重な資料を提供すると期待される部面が、なしとはしない。

「隠岐島の昔話と方言」は、僅か八十三頁の小冊子の中に多くの言語資料を含み乍ら、惜しむらくは中村方言（所謂ンラゴエ）のみであること、表記に不明瞭、不統一な点の多いこと等が、その利用範囲を著しく狭めている。一日一日標準語化の波に洗われ乍らも古老の口に言い継がれている隠岐言葉を、裃を脱いで（俚言丸出しで）孫達に語って聞かせる昔話の文脈中に拾うため、隠岐全島に亘る『隠岐の昔話、伝説』の蒐輯をテープ・コーダーによって行おう。――限られた調査日数を前にして言語班のプランはこう決った――昭和三十一・二両年度に亘って蒐輯せられた昔話は五十数話、そこには数々の資料が吾々の整理の手を待っている。

一方、

文学班――では、穏地郡都万村中里の高田明神に珍蔵される『隠岐高田明神百首和歌』の調査翻刻が、昨年以来もっとも大きな仕事となっている。「百首和歌」は早く「隠州視聴記」にその名が見え、吉田東伍氏の「大日本地名辞書」にも紹介せられはしたが、その後本格的な調査は受けていなかった。至徳年間（一三八六年）菟玖波集撰集に遅れること三十一年後、高田明神の神託によって、当時金蓮寺（京都四条京極）にあった僧浄阿が歌壇の大御所的存在だった二条良基などに説き廻り、百首和歌と千句連歌とを勧進、これを奉納したのであった。これは都万の代官佐々木氏等の発意になるものらしい。後惜しくも千句連歌は失われ、「巻頭朽ちて題号を失す。仮名の序あり、半より未残れ」（視聴記）る「百首和歌」が今に残存する。昨年度の予備調査で吉永教授、東郷助手の手によって一応翻刻、報告された（文学論集、6の3・4）が、なお細部再調を要する点もあり、本年度は複製本作製の手筈を整える。「百首和歌」の解読によって、未詳であった菟玖波集の作者――藤原忠頼、乗阿、切阿など――が明らかにされるなど、その中世和歌史の解明に一つの資料として貢献するところは少なくないであろう。

本年度は、日数の許す限り「百首和歌」を中心に「高田明神縁起」二種（各二巻）「都万八景」（和歌色紙）「隠州視聴記」「同合紀」「遠島百首」等の接写撮影、筆写校合等の書誌学的調査を行い、帰来後整理することにした。

限られた調査日数、その上班員数も手薄である。可及的最大限に効果を挙げるためには、スムースな日程の運びと全員の協力が不可欠のものとなる。言語・文

学両班協力の調査旅行は、こうして七月十九日昧爽浦郷港着とともに強行された。

三十二年度調査日誌の抜萃

○　七月二十日、大阪から来た身には涼しい朝風を楽しみつつ、早々に別府の宿を出て大山（オヤマ）（知夫郡西之島町）までテクル。今年は、テクルにはもってこいのデンスケが小野君の肩に掛っている。船の便悪く、午後までの時間待ちを惜しんだ罰か、雨上りのヌカルミに難渋、部落会長の宅に着いた時は全員（吉永、土部、神堀、小野）汗みどろになっていた。大山は島前でも長寿村で有名な所。爺さん婆さん各二名が、他所者の調査者にも気をおかずさかんに話しかけてくれる。調査者にとって全く有難い被調査者――中でも吉田半次郎氏（八十七才）の笑話（「牡丹餅は娃」天福地福型）は昔話としても貴重なもの――で、農協の万田氏の親身な御世話に感謝した次第。――期待に反しない採集地だった。

夕食後早速万田氏を通訳に文字化が始まる。――今年は、出来るだけ現地で文字化を、という方針。「トブナェエ（跳ぶなよ）」か、「トブネエ」か、「トブネエ」かと耳を集めて論議が始まる。臨時通訳に顔を出した当地出身の女中さん、「エミサヤワカリャエージャラ（意味さえ分かれば良いだろう）」と言って不審顔。

○　七月二十二日、昨年は焼火山（タクヒ）頂の舞殿で聞いた隠岐神楽（重要無形文化財）を、今年は松浦康麿氏に御世話願って別府の海神社渡御の祭日に宿で録音する。石塚章備前守の口から流れる「サダヒコ（袋田彦）の大神とはわがことなり」という詞章を聞いて、＜サルタヒコ＞サンタヒコ（或いはサッタヒコ）＞サダヒコ＞というラ行音の撥・促音化現象が、口承される神楽歌（文語）の中にまで見られることに興味が引かれる。

○　七月二十三日、今日は島前最大の漁港浦郷の調査。農協の重谷、清水両氏は公務の余暇をさいて被調査者集めに奔走して下さる。――老爺二名、老婆三名。辰巳ヨシ氏（七十五才）は流暢な舌端に浦郷声を乗せて、化猫にまつわる説話を語ってくれる。実に舌捌きが早い。促音化の多いことが耳立つ。島後の人々がドーゼゴエ（島前声）と言っているのは、主としてこの促音現象を指すと言う。

○　七月二十四日、重谷氏の御世話で波止（ハシ）（西之島町大字美田（ミタ））に渡り、浦郷町町役場の山番を長らく勤め他所には出たことがないという老爺（川井六次郎氏・七十四才）を訪う。コトバを期待して行ったのだが、ここで「庄次郎（宗次郎とも―共に音訳）」という古い民謡を聞き得た（断片的なものは浦郷でも聴取したが）のは予想外の収穫だった。昨年は、玉若酢神社付近を毎日新聞記者に導かれて半日求めて廻り乍ら、不幸出会い得なかったもの。

＜ハエー　キョーワ　ヒモヨイ、テンキモ　ヨイガ、
エー　シンゾ（新造船）　オロ（下）エテ、オキノリ
ミマショ。……
＜ハエー　ソヨト　フクカジャ　ハルアエ（東北東風）
ノカジェ、
エー　カジェガ　ヨケレバ、ミナトモ　ヨセヌ。

四節二連で続く悠然とした調べ。漁夫が、夜を通しての出漁にすっかり疲れてしまった夜明け時や、不漁で船中意気銷沈した時、重苦しい気分を慰め気勢を挙げるために唱う舟歌である、という。

○　七月二十六～八日、昨日（二十五日、西郷町での研究発表会）から全スタッフ出揃う。揃ったかと思うとしばしの別れ――二十九日までは言語・文学別行動をとることになるからである。二十六日、言語班（広戸・土部・小野・村岡、更に現地参加の島大生池田操緒さん）は賀茂へ定期バスで、文学班（吉永・小原・神堀）は魚澄教授、薗田講師と共にハイヤーを雇って都万へ出発した。

言語班は賀茂小学校宿直室で方言採録。無声化（母音脱落）が耳立つ。二重母音も複雑だ。「通った」を「トータ」という――出雲からの移入だろうか。野津仰摩氏（六十三才）語る「鼠の浄土」の昔話は、隠岐の昔話の系譜を示す興味あるものだった。夜間は、内田兼四郎氏（賀茂小学校教頭）の通訳で激しい雨音を聞きながらテープの文字化を急ぐ。就寝午前二時。

二十七日、言語班のこれからの数日間は、早朝出発、午前中に被調査者集め、午後調査、夜間文字化と再調、という強行軍である。広戸助教授の健康が気になるが、今朝はまず上々。雨上りのヌカルミを踏んで原田（旧中条村（ナカジョウムラ））に向かい出発する。吉田荒男氏宅では既に調査の準備が整っていた。

方言採録を終り、しばし座頭の三味線でシゲサ、ドッサリ、隠岐追分などの民謡を楽しむ。去年は、隠岐の民謡を聞くと「遥々来ぬる旅をしぞ思」ったが、今年は却って落ち着く。隠岐の水が身体に合ったのだろうか。夜間の文字化はさすがに疲れを感じる。「コーユー　コトワ　オマエラー　マダ　シラザッタジャラ、ズケニ（知らなかっただろうから）ジーサンガ　ハナシテキカスルケニ」――たびたび「アズ」がとび出す。――「終助詞です」（と広戸助教授）「いや、ウズ（むとす＞むず）から来たアズです。まだ助動詞でしょう」（と筆者）見解の相異を生んで論議は続く。「その辺で寝るとしませんか。広戸惇氏（アツシ）が病篤（ヤマイアツ）し氏にならぬよう願います」という村岡君の弁で就寝、午前三時。

二十八日、早朝布施に赴く。池田貞次郎氏（布施小学校教頭）の御奔走に拘らず、適当な被調査者が見付からず夕方に至る。責任を感じて下さった村長さんが御父堂湯川庄太氏（七十七才）を伴い来られて、ほっとした次第。遠い耳に反して確かな記憶、大きい声――苦労

しただけ採録の喜びも大きい――歌にまつわる笑話の数々を採録、文字化の終った時は翌朝の出発までにいくらも時間が残されていなかった。

この三日間、文学班は「高田明神」に参籠、文書調査に没頭した。――初日は「百首和歌」再調のため魚澄教授、薗田講師も来駕された。「百首和歌」の再校が終って「高田明神縁起」を再調。「縁起」にはⒶ紺青表紙のものとⒷ丹表紙のものとがあり、両種とも上下二巻、唐木合せ軸で、仙花紙。白・萠黄・薄焦茶の組紐が付いている。両者間の異同・先後については帰来後校勘する（Ⓑの方に漢文表記多し）ことにして、「都万八景」（和歌色紙）、連歌懐紙若干（完全保存のものなく、いずれも断片）、棟札数種を調査する。

二十六、七両日は、雨又雨、カラー写真は勿論接写の術なく、昼夜を分かたず鋭意筆写校合に励んだ。電灯のない拝殿では調査困難――神主、氏子総代、村教育長ら関係者の御高配によって、宿舎で調査できたのは不幸中の幸いだった。二十八日朝、曇天頭上に垂れ籠め光線不足であるが、「百首和歌」（カラー・フィルムで）「縁起」（二種とも）の接写撮影を強行した。――悪戦苦闘の三日二晩、皮肉や昼過ぎ雲切れて真夏の太陽さりげなく顔を出す。――文書調査を終って、高田明神社、高田山その他近郷を踏査する。

○　七月二十九日、再び言語・文学両班員が相まみえる日。横地氏の「隠岐島の昔話と方言」が生まれた村「中村」の言語調査である。言語班は布施から陸路をバスで、文学班は海路を島後東廻りの船で、それぞれ中村入りする。早速両班の三日間に亘る調査結果を報告し合う。昼食は、同じことなら景勝の地「白島」でとろう、ということになり、丁度教職員組合青年部の方達が一隻船をチャーターして飯盒炊さんに出かけるところで、島大卒業生千葉ふゆみ氏の御世話で便乗を依頼する。白島は島前の国賀と並び称せられる大景観。横地氏の「昔話」に出てくる鎧岩・兜岩（平家の大将ノリダさんの脱いだ鎧・兜がそのまま石になったという）など隠岐特有の板状流紋岩の見事な風光は、絶好の日和と共に連日の調査疲れを癒すのに充分だった。

早目に夕食を済ませて上元屋（カミガンヤ）（中村大字元屋の小字）までテクル。横地氏への昔話提供者は勿論今は亡く（最近日までの生存者も昭和四年歿）、彼等によって伝承された昔話もその殆んどは後を断っている。コトバの方も、隠岐弥果の地ながら二十年の歳月が標準語化の怒濤で洗浄していた。井原虎一氏（七十三才）の語る「しんどての川子」の話（中村に川子がおらなくなった由来話）や「元屋の世の中桜」の話（三光国師隠岐島渡来の伝説）に、ラジオのない炉端で昔話を語った老爺を偲び、「二十年前にテープ・コーダーが作られていたら」としみじみ述懐したことだった。今にして採録しておかなければ、十年後にはこれら僅かに残存する昔話もその俚言とともに失われてしまうであろう。

○　七月三十一日、島後調査最後の日。言語班は中条との比較調査のため、昨年度の調査地東郷（西郷町）へ再調に向かう。両年度とも郷土研究家赤地林市氏に親身な援助を賜った。文学班は、国分寺址（後醍醐天皇行在所跡）及び「百首和歌」勧進に力をつくしたと思われる乗阿が住持したという大光寺址を尋ねたが、大した手懸りは得られなかった。夜、第一隠岐丸で全員知夫へ渡る。

○　八月一日、知夫中学（知夫村字郡（コオリ））宿直室で方言採録。知夫里島には今なお昼間送電なくデンスケを使用する。しばらく島後を歩き廻った耳にはチブリゴエが全く違った地方のコトバに響く。佐藤スミ氏（七十四才）のコトバはほとんど俚言そのもので、音韻転化の要因を探るのに恰好な発音多くエット喜んだ。夜間送電とともに教育委員会の前原典久、知夫中学の出アサ子両氏の通訳でテープの文字化にかかる。文字化終了後二時間、隠岐島離別の合図――第二隠岐丸の汽笛が暗黒の海を渡って来た。

この日、文学班の神堀氏は徒歩古海（クルミ）の横山弥四郎翁宅訪問、「遠島（隠岐）百首」の諸本を閲覧、夕刻帰来した。

○　八月二日早暁境港着、ここで一応開散。文学班は記紀神話、出雲風土記の地踏査に、言語班は雲伯方言調査のため更に西下、それぞれ袂を分かった。

（文学部講師）

昭和31年
校友名簿
在学時代の友を想うよすがに、
また、卒業後の親睦連絡に、
この一冊を備えて御利用下さい
―収載人員二六、〇〇〇余名―
B5判　六〇〇頁
実費頒価五〇〇円
（送料当方負担）
申込先　關西大學校友課
大阪市大淀区長柄中通二丁目
振替大阪一二八七五番

学内報

「アジアの歴史と現状」講演会

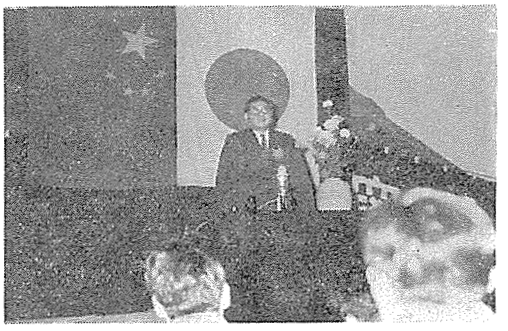
本学文学部及び東西学術研究所共同主催、毎日新聞社、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会後援で、十二月十四日(土)午後一時より毎日新聞社大阪本社講堂において、「アジアの歴史と現状」について講演会が行われた。なお演題、講師左の通り

世界史とアラビア民族　本学助教授　藤本勝次
イランの今昔　本学講師　加藤一朗
インド文芸と植物　龍谷大教授　木村秀雄
新中国と宗教　京大人文科学研究所長文博　塚本善隆

趙安博氏講演

来日中の中国紅十字会代表の一員、趙安博氏に十二月十三日(金)午後八時本学天六学舎を訪れ、学長らと懇談后、約一時間に亘り「新しい中国について」講演を行つた。

なお、翌十四日(土)千里山学舎を訪れる予定であつたが、氏の都合で中止となつた。



趙安博氏講演

宮中市子氏に賞状

千里山図書館勤務書記宮中市子氏が不撓の努力により編集した「わが国におけるマツクス・ウエーバーの文献目録」は本学「経済論集」第六巻第二号(昭和三十一年五月刊)に発表されて以来、関係学術誌や単行本に引用され稗益するところ多大であつたので、これに対し私立大学図書館協会より第一回協会賞を授与されたが、本学においても十二月三日(火)理事会より同氏に賞状が授けられた。

人事異動

昭和三十二年十月一日付
教授に任ずる
専任講師　川元英二

昭和三十二年十月一日付
補導主事を命ずる
教授　川元英二

昭和三十二年十月一日付
本大学専任講師に任じ文学部勤務を命ずる
講師　小川隆夫

昭和三十二年十一月十八日付
任期満了につき大学院文学研究科幹事を解く
教授　飯田正一

昭和三十二年十一月十九日付
大学院文学研究科幹事を命ずる
教授　金子又兵衛

昭和三十二年十一月二十五日付
任期満了につき学部学生部長を解く
教授　山田松太郎

昭和三十二年十一月二十六日付
学部学生部長を命ずる
教授　山田松太郎

教授の諸活動

板橋教授　宮中園遊会に招かる

本学商学部板橋菊松教授は、永年私学振興のため尽力した功を賞で、その労を犒うため、十一月四日(月)宮中園遊会に招かれるの栄に浴した。

学会出張

◇文学部橋田慶蔵専任講師は九月二十四日から二十八日まで東北大学における電気通信学会に出席。

◇経済学部越後和典助教授、商学部寺尾晃洋専任講師、沼田昭夫助手は十月十六日から二十日まで中央大学における日本交通学会及び公益事業学会に出席。

◇文学部本庄良邦助教授は十月十七日から二十日まで東京教育大学における日本教育社会学会に出席。

◇文学部石浜純太郎、壷井義正両教授は十月十七日から二十二日まで名古屋大学における日本中国学会、漢文教育連絡協議会に出席。

◇文学部高尾国男、見次直雄両教授、脇坂豊、丸山三友両専任講師は十月十七日から二十四日まで東北大学における日本独文学会に出席。

◇文学部福本喜之助教授は十月十七日から二十四日まで東北大学における日本独文学会に出席し、「未完の詩 Deutsche Größe の草案を中心としてみたシラーの言語観」について研究発表を行つた。

◇文学部川口勇教授、辻岡美延助教授は十月十七日から二十四日まで九州大学における日本心理学会に出席。

◇経済学部花戸竜蔵教授、佐藤博助手商学部広田司朗助教授は十月十八日から二十二日まで横浜大学における財政学会に

秋も深まり千里山も紅葉した錦に彩られ、学生達は勉学に、課外の活動に、大いに活躍し、秋の各リーグ戦も大半は終り、体育、文化の領域で素晴らしい成績を挙げている。

相撲部

第七回西日本選抜学生相撲山坂大会は十月十五日午後一時から大阪田辺山坂神社で行われたが、団体、個人共昨年に引続き優勝した。

団体リーグ

関大 5—0 大衛大
関大 3—2 近大
関大 4—1 立命
関大 5—0 同大
関大 4—1 関学

5勝21点を獲得し団体優勝

個人俵秀八選手トーナメント

一回戦

上段勝

田畑（立命） 突き倒し 岡崎（関大）
寿（関大） 引き落し 柴田（同大）
井上（関大） うつちやり 鍵田（関大）
横山（関大） 下手出し投げ 竹内（同大）
準決勝
寿 上手投げ 田畑
横山 上手投げ 井上
三位決定戦
田畑 押し出し 井上
決勝
寿 浴せ倒し 横山

ホッケー部

十月三十日で関西学生ホッケー・リーグ戦は終了。最終日関学を4—3で敗り優勝した。

10月20日 関 大 6（2—0 4—1）1 天理大 於西宮
10月21日 関 大 6（3—0 3—0）0 大市大 於神戸東遊園地
10月24日 関 大 4（3—1 1—0）1 和 大 於神戸磯上
10月27日 関 大 5（3—1 2—2）3 立命大 於西宮
10月30日 関 大 4（1—2 3—1）3 関 学 於神戸東遊園地

本学は5勝し優勝した。

第六回全日本学生ホッケー選手権は十一月二日神戸東遊園地及磯上の両珠技場で行われ、本学は甲南大を9—2で破り準々決勝に進出、北海学園大を3—2で準決勝への出場権を得たが、法政大に後半大量得点され、7—1で敗れた。

11月4日 法政大7（1—1 6—0）1 関 大 於神戸東遊園地

野球部

秋季関西六大学野球リーグ戦は、四日関大—神大戦をもつて終了したが、本学は前半対立命、対同大戦での試合運びの失敗から三位に止どまつた。唯リーデングヒッターとなつた中堅野口が、打撃不振の本学にあつて一人気を吐いていたのは注目されてよい。

対関学神大戦の戦績は次の通りである。

10月26日 於日生

関大	1	0	2	0	0	0	0	2	5
関学	0	0	0	0	0	0	0	1	1

10月27日 於日生

関学	0	0	0	0	0	0	0	1	1
関大	0	1	1	0	0	0	0	0	2

11月2日 於日生

関大	1	5	0	0	2	1	0	0	9
神大	0	0	0	0	0	0	0	0	0

11月3日 於日生

神大	0	0	0	0	0	0	0	0	0
関大	0	0	0	0	1	0	0	0	1

11月4日 日没引分

関大	3	0	1	0	0	0	0	0	4
神大	1	0	0	0	0	0	1	0	2

於日生

出席。

◇文学部金戸嘉七教授は十月二十日から二十六日まで明治大学における学会及び学会研究委員会に出席。

◇文学部井上吉次郎、中井駿二両教授、吉田民人助手は十月二十二日から二十七日まで明治大学における日本新聞学会に出席。

◇文学部横田健一教授は十月二十三日から二十八日まで九州大学における日本民族学協会及び日本人類学会に出席。

◇文学部金子又兵衛教授は十月二十四日から二十七日まで宇都宮大学における日本近世文学会に出席。

◇文学部田中英三専任講師は十月二十四日から二十八日まで大正大学における日本宗教会学会及び学術研究会に出席。

◇経済学部市原亮平助教授は十月二十五日から三十一日まで東京大学における土地制度史学会に出席。

◇経済学部入江深専任講師は十月三十日から十一月二日まで九州大学における日本機械学会に出席。

◇商学部酒井文雄助教授、河合信雄、清水宗一、末政芳信各専任講師、松谷勉、山上達人、大橋昭一各助手、経済学部鮏江城夫専任講師は十一月七日から十一日まで東京大学における日本経営学会に出席。

◇経済部学三谷友吉教授、高本昇専任講師は十一月七日から十一日まで成蹊大学における理論計量経済学会に出席。

◇経済学部荒井政治助教授は十一月八日から十一日まで東京大学における史学会大会に出席。

◇文学部魚澄惣五郎、原弘二郎両教授、有坂隆道助教授、薗田香融専任講師は十一月八日から十一日まで大正大学における西蔵学会史学会及び東京大学における東京大学史学会に出席。

◇文学部小方厚彦助教授は十一月十六日から十八日まで法政大学における日本言語学会に出席。

◇文学部吉永登教授は十一月十六日から十九日まで近江今津における万葉学会に出席。

◇文学部杉原弘人助教授は十一月二十二日から二十四日まで名古屋市立大学における日本衛生動物学会及び寄生虫学会に出席。

文化会

文化会が初めて企画遂行した音楽祭が去る十一月八日産経会館で盛大に挙行された。出演各パートは、軽音楽部（コンボ、ウエスタン、スウキング）・グリークラブ・交響楽団・賛助出演として、応援団吹奏楽団等であつた。

会場は定刻前より詰めかけた聴衆で瞬く間に立錐の余地なく埋めつくされ、主催者は会場の整理が思う様に出来ないのでうれしい悲鳴をあげていた。

グリークラブは最近益々充実し、演奏曲目もクラシツクなものが多く、関西の楽団からも注目されている。当日は、㈠宗教曲、㈡黒人霊歌、㈢日本歌曲に万場の拍手を浴びた。

軽音楽はスウキング、ウエスタン、コンボが出演したが各バンド共軽音楽フアンの割れる様な声援を受け、賛助出演の応援団吹奏楽団は漸次その内容を充実、常に大阪府警吹奏楽団と共に練習、技術的にも仲々の上達ぶりを発揮していた。

司法試験合格者懇談会

昭和三十二年度司法試験合格者を囲んで懇談会が十二月三日（火）午後五時より千里山第一学舎第一会議室で行われた。

なお、合格者は左の通りである。

土井　仁臣（専一法・昭二四年卒）
浜本　恒哉（学一法・昭二七年卒）
中島　三郎（学一法・昭二七年卒）
大西　浅雄（学一法・昭二九年卒）
佐藤惣一郎（学二法・昭三〇年卒）
米田　泰郎（学二法・昭三一年卒）
上田　稔（学二法・昭三一年卒）
長山　享（学一法・昭三一年卒）
津村　節蔵（学一法・昭三一年卒）
竹内　知行（学一法・三年次在学中）

ユネスコ研究部

恒例の近畿ゼミナールが十一月二十三四の両日華蔵院（宝塚市中山寺）に於て行われる。この大会は近畿各地域のユネスコ活動関係者（大学）が集り、対外活動の総合的研究と各校の親睦を目的に開催されるが、本年度は青少年問題を中心とした「家庭教育」のテーマのもとに、道徳問題、マスコミ、家族制度、等を各分科会で取上げられ、活発な討論が展開されるものと思われる。

文芸部

千里山文学十九号合評会は、先月二十九日に山本顕問教授を迎えて、茶房オランダで開かれた。つづく関大詩人二号の批評会も、〃御門〃であり、先輩山田ひろよ氏も出席下された。氏は今大阪で詩誌〃樹木派〃を出されている。

今、部は詩画展を計画している。これは、〃関大詩人〃のメンバーで、十二月中頃の予定であり、近々、米田部員の三好達治研究発表がある。関西在住の詩人作家を招いて講演会を開くことも計画されている。

吟詩部

最近の吟詩部の活動日程を紹介すると十一月十七日（日）一時より桜宮会館で、関大二部の主催で行われる関西学生競吟大会がある。この大会には、当部より二十名出吟する。昨年は五名の入賞者を出し、関西学生吟詠界の王座を成したが、今年も上位入賞は佐々木主将以下関大色で塗られた。

十一月二十三日（土）には、東西大学吟詩連盟親睦会が本学第二学舎講堂で行われたが、これは翌二十四日（日）十時より朝日新聞社講堂で開かれた東西大学交歓吟詩大会の前夜祭ともいうべきものである。二十四日（日）の交歓大会には関東より七十名が遠征、当部より三十名出吟し全国の学生吟士百余名が参加する第一回の交歓、親睦の大会であつた。

十一月二十七日（水）午前十一時より第二学舎一〇三教室にて、恒例の第六回学内吟詩大会が催された。この大会も年、春秋二回行われ、今回で六回を数える事となり、一般学生にもなじみ深いものとなつた。従つて部員数も今や百名を越えた豪華な会である。

第三回関西学生珠算競技大会　初優勝

関西学生珠算連盟主催の第三回関西学生珠算競技大会が、十一月十日近畿大学講堂で開催され、団体総合では本学が初優勝した。尚個人の部では優勝は逸したが二位以下を独占した。

当日の成績次の通り

団体総合競技の部
優勝　関西大学
二位　立命館大学
三位　同志社大学

個人総合競技の部
優勝　野間　茂（立命館大）
二位　三輪国明（関西大）
〃　伴　睦美（関西大）
三位　山下三郎（関西大）
〃　岩崎良和（大商大）
〃　谷竜之助（関西大）

商学研究部

商学研究部は、春秋二回に渡り西日本学生会計学研究会並に全日本学生経営学研究会西部々会、又は年一回の全日本学生会計学研究会並に全日本学生経営学研究会に参加し、各大学と交換討論、研究発表等を行つているが、去る十一月二、三の両日会計パートは、福岡大学で開催された第八回西日本学生会計学研究会に一方経営パートは同月二、三、四の三日間山口大学で開催された全日本学生経営学研究会西部々会に各々参加、討論に或は研究発表に多大な成果を納めて来た。

尚会計学会に於ける統一論題は減価償却論であつた。一方経営学会に於ては、本学商学部三年次の丸谷君が自由論題として「我が国に於ける中小企業の労務管理」と題して研究発表をした。

尚来る昭和三十三年七月には第四回全日本学生会計学研究会を主催校として開催する事に決定し、今その準備に或は研究活動に部員は多忙な毎日を送つている。

校友バッチ

校友

校友会本部の動き

十一月

今月は昭和三十二年度校友総会を目前にひかえ各部とも準備のため本格的活動を行つた。また支部の方も総会直前に生野、東両支部が誕生し本部からも祝福のため会長外役員が、学長ら学校関係者とともに出席した。

五日　東京支部総会・午後五時半、レストラン「とうきよう」・長柄副会長出席。

十三日　組織部会・午後六時、天六理事会議室

十四日　生野支部発会式・午後五時半、生野区役所・岩崎学長、矢野常務監事

大月会長、門上組織部長出席

十四日　東支部発会式・午後六時、東区役所・岩崎学長、大月会長、寺西組織副部長出席

十五日　広報部・機関紙「関大」第三〇号発行

十六日　代議員会・午前十一時、中之島中央公会堂

十六日　校友総会・午後二時半、中之島中央公会堂

十八日　組織部学友会懇談会・午前五時半天六理事会議室

十八日　組織部会・午後七時、グリル「絹笠」

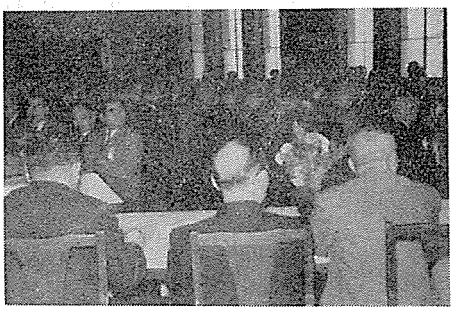
二十日　広報部会・午後六時、校友会事務局室

二十二日　南支部役員会・午後六時・安田信一教授出席

二十七日　第一回代議員銓衡委員会・午後六時、天六理事会議室

二十八日　尼崎支部部会・午後六時、尼崎文化会館・岩崎学長、森川教授、大月会長出席

代議員会



昭和32年度第二回代議員会

昭和三十二年度第二回目の代議員会は十一月十六日(土)午前十一時から大阪中之島中央公会堂で開催。

長柄副会長が開会の挨拶、各部長から事業報告並に財務部長の会計決算報告があり、監事から会計監査報告があつて全報告が承認された。そのあと会則改正について長柄副会長から提案理由の説明があつたが、代議員間でこの問題につき意見が続出、そのため次の総会運営に時間的支障を来たしてはいけないので次回代議員会で再度慎重に討議することになつた。最後に大石副会長が閉会の挨拶をのべて午後二時半散会した。

今年度校友総会

今年度校友総会は十一月十六日(土)午後二時半から中之島中央公会堂で開催。長柄副会長の開会の辞で始まり、大月会長が祝辞をのべ、つゞいて白川理事長、岩崎学長、阿部評議員会議長から祝詞があつた。大月伸氏が議長になつて議事に入り、各部事業報告と会計報告並びに会計監査報告がそれぞれ承認された。役員選出は会長銓衡委員と代議員銓衡委員が議長によつて指名され、会長は少時協議の結果、前会長大月伸氏を新任会長に再び推薦することに決定、総会席上満場の賛成を得て議決。代議員選出は総会後銓衡委員会で協議決定し事後報告をすることで承認。また会則改正は次回代議員会に改正決定権を付託することが承認された。総会議事を終つて松原藤由教授の「欧米をめぐりて」と題する講演があり、最後に十郎、雁玉の万才、森狂声氏の腹話術があつて終了した。その後会場を三階ホールに移して懇親会を開催、和やかに歓談し午後八時半散会した。

東京支部総会

東京支部では十一月五日(火)夕刻からレストラン「とうきよう」に於て今年度秋季総会を開催。

会は香西副支部長の開会の辞で始まり、故武田宣英氏の霊に対して黙祷を捧げ、中山支部長の挨拶に続き、長柄副会長から大学の模様、校友会の現状を詳細にわたり報告し一同その将来性に感銘を深めた。

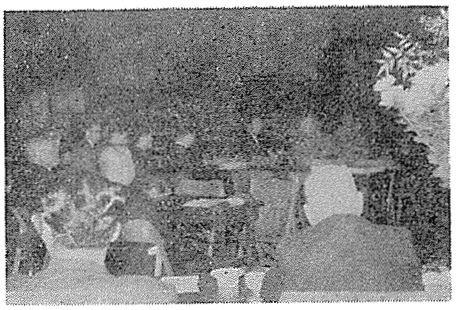
宴会に入り新出席会員の自己紹介があり、引続きかくれた芸能家がしばしば出演し一同陶酔、歓談後母校、校友会、東京支部の万才を三唱して散会した。

当日出席者

浦田関太郎、梅田茂、植松圭太、秋元東洋男、有重栄、岡本進、大先一成、大西康雄、遠藤敏雄、井口一一、植田八郎、亀井寛、桐山一雄、倉光安峯、香西政一、今野勝久、諏訪宮三郎、柴田一夫所剛夫、田辺明四郎、戸根泰雄、永井恵美太、野坂真三、弘中百合登、平田儀一、本郷桂、平岡啓道、丸物彰、皆木鉄夫、吉本英雄、山地仁、山根実、鈴木康之、村上誠一、弓削多義郎、河合治、甲斐亀夫、嶋野弘、奥田隆、本田孝一、中山幸市畑孝郎、中村篤吉、伊藤孝行、新田富治、浅井弘雄、坂東敬介、塩田健一、古川憲夫、吉田有宏、中川啓、岡田孝一、筒井淳造、笹部竹次郎、村中森五郎、韓行煥、井口卯平、安田義哲、酒井実雄沢田勇夫、安達竹七、三枝芳郎

東支部発会式

支部設立の準備が整つた東区では十一月十四日（水）午後六時から東区役所講堂で発会式を開催。大学から岩崎学長、校友会から大月会長、寺西組織副部長が出席した。尾坂照雄氏の司会で、開催挨拶経過報告が植田完治氏よりのべられた。議長に松本芳太郎氏が推され、会則の決定可決、役員選任を銓衡委員による協議の結果決定した。



東支部発会式

こゝで来賓岩崎学長の祝辞があり、つゞいて大月会長、寺西組織副部長がそれぞれ発会を祝し、最後に祝電が披露されて閉会、懇親会に入つた。続く乾杯ののち学歌斉唱、万才三唱をもつて散会。

当日決定役員

支部長　植田完治
副支部長　尾坂照雄、竹内幸一郎、片野総一郎
出席者　福原武一、小堀欣二、東端亀市、尾坂照雄、和田秀一、前田勉、西川憲治郎、奥野信夫、近藤宏、山本清之助、山地利正、東栄、竹内幸一郎、片野総一郎、寒川喜一、植田完治、森田文一郎、千葉安太郎、古沢英夫、松本善右衛門、藤井千賀郎、瀬尾英二、一ノ瀬之、東保男、前田純、小森三郎、河村賢一、武藤幹、山下薫、村田甫、中島利郎、木村順次郎、加藤高志、山田泰弘、北野文弥、田中栄蔵、富山照雄、土井六郎、家満登武彦、田淵三郎、古林武夫、久米巌、吉田利治、坪内好一、中野亜雄、前田光一、宮川一男、磯見順造、都栄治、内藤正剛、浜口照幸、竹田明、松本芳太郎

生野支部発会式

生野支部発会式

生野区でかねて支部設立準備中であつたが、十一月十四日（木）午後五後半から生野区役所に於て発会式を開催した。

当日は本部及び大学側から岩崎学長、矢野常務監事、大月会長、門上組織部長が出席、東真嗣氏の司会で始められた。馬場次郎氏が議長となり、会則決定後、銓衡委員によつて役員を選出。議事終了後懇談、学歌斉唱、万才三唱を行つて九時閉会した。

決定役員
支部長　馬場次郎
副支部長　井上太啓止、北川楢雄
幹事長　田中正治
副幹事長　東真嗣
会計　沖中恒雄

尼崎支部

尼崎支部では十一月二十八日（木）午後六時半から尼崎市文化会館で総会を開催大学から岩崎学長、森川教授、校友会から大月会長が出席した。

議事の支部機構改革の件は支部を四区に分ち、それぞれ連絡責任者をおき運営を円滑にすることになつた。また役員改選は幹事で協議、明春総会の時に承認を求めて交代するように決定した。このほか地区別名簿作成を企画、議事を終了、学長の談話、大月会長の祝辞、森川教授の談話があつて懇親会に移つた。一同朗らかに歓談したのち閉会した。

当日出席者
堤熊治、松永三郎、大森庄三郎、浜名慶次郎、吉田吉太郎、中西順吉、松尾高一、須佐美八蔵、近藤新次郎、古本宗作、平川政雄、川井幸太郎、渡辺二郎、橘谷弘、貴村一雄、小川喜志雄、多田時造、岩本公夫、弓場晴男、山本三郎、徳千代又一、西谷輝久、長谷川雅樹、柳楽喜祐、小林弘昌、池田美佐夫、西村登、宮田輝穂、岩崎茂、松本磐、竹田輝治、酒匂正則、松本慎三、和田税、高岸友郎、新谷義明、奥井彰、荒木康夫、田中穣

一高同窓会総会

一高同窓会では本年度総会を十一月十一日（日）母校講堂で開催。

総会の席上次の各項を決議した。

1、昭和三十三年度役員の選出については現委員会に一任する。

2、会則を次の通り改める。

イ、文章の全般を平易に改める。

ロ、第四条第三項に「顧問若干名」を入れる。

ハ、第五条第二項に「顧問は委員会が推薦する。」を入れる。

3、名誉顧問に矢口名誉校長を推薦する。

議事終了後新築図書閲覧室で懇親会を行い、恩師、会員からかくし芸が披露され、そのあとのど自慢、和気溢れるうちに午後七時過散会した。

当日出席者　三島校長、長谷川、馬渡、佐々木名教論、横山茂昭
会員　久保隆男、関充男、西村久、丸尾調淳、向井稽一、森本与一、尾関義男、塚田正則、酒井彦一、西村元成、上田義治、北村有、上山喜雄、大縄初雄、飯尾美夫、山口卓志、藤岡鈴、小川賀庸、藤原邦夫、山村繁雄、増田馨、金本秀雄、高野昇三、東城昭彦、藤本登、今西崇治、岡本明、北村公宏、阪井啓剛、牧野清、柳田正之祐、梅原要次伊東真二、東薫、折口裕三、大橋博、松溪洋、山口正夫、浅井郁松、木村睦、桃井延章、吉田一義大島功、山下民博、国生勝、竹市義明、辻尚一、小野正夫、安田清之助、山村英夫、立花久幸、若林昭夫、今村常泰、大塚信行、井関吉郎、高桑義弘、村元佑次、速山衛、西岡良純、西村勲、浜西俊雄、古山宗一、中井富太郎、矢倉啓三、水沼容亘、山村利月、新井祥三、生田房治、重上洋、細川学、富田泰三、福井成康、田中延幸、高山雅一岡田一男、清家道生、玉谷吉賢、築山寿雄、加藤肇、平島一男、福井達、前田卓三、河村修一、六岡一利、高木義弘、笠原宜彦

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十二年十二月三十日発行（毎月一回三十日発行）
關西大學學報 第三一〇號 十二月號
編集兼発行人 久井忠雄
発行所 關西大學出版部
大阪市大淀区長柄中通二丁目
電話堀川(35)二〇七二番
振替大阪二六七七二番

關西大學学生募集

昭和33年度

大学院
修士課程　法学・文学・経済学各研究科
博士課程　法学・文学・経済学各研究科

学部（第一部＝昼間・第二部＝夜間）
法学部　法律学科・政治学科
経済学部　経済学科
文学部　英文・国文・哲学・仏文・独文・史学・新聞・東洋文学の各学科
商学部　商学科
（新設）工学部（第一部のみ）機械・電気・化学・金属の各学科

部別	願書受付期間	試験日
法・商（第一部・第二部）	2月1日～3月6日	3月9日
経・文（第一部・第二部）	2月1日～3月7日	3月10日
（新設）工（第一部）	2月1日～3月6日	3月8日・9日

第一高等学校・第一中学校

学校別	願書受付期間	試験日
一高	2月21日～3月3日	3月5日・6日
一中	3月1日～3月10日	3月11日・12日

入学案内　学部（要66円送料共）　關西大學庶務課宛　吹田市千里山又は大阪市大淀区長柄
高・中（要58円送料共）　高等学校・中学校各教務課宛　吹田市垂水一四四

關西大學七十年史

A5判　本文　七〇〇頁　特製上質紙使用
資料編　一五四頁　布クロース美装
口絵　五七頁　函入

内容目次

第一章　關西法律学校の創業
第二章　河内町興正寺時代
第三章　江戸堀時代
第四章　福島時代
第五章　福島、千里山時代
第六章　千里山及天六時代
第七章　新制大学の時代
資料編（關西大学七十年史年表その他）

刊行　關西大學

「關西大學七十年史」は、關西大学創立七十周年記念事業の一つとして企画されて以来、修史に、編集に、遺憾なきを期して着々進められていましたが、この程完成をみましたことは御同慶に堪えません。
本年史御希望の方には実費金壱千五百円（送料共）にて御頒布いたしますから何卒、大学出版部まで御申込み下さる様お願いします。

刊行取扱　關西大學出版部